

# 「万葉集編纂構想論」が拓く地平

城 崎 陽 子

一 はじめに——伊藤博論以後の問題——

近時、段階的に成立した構造体として『万葉集』を見るのではなく、一つのテキストとして『万葉集』をとらえ、二十巻全体が持つ意義について説明しようとする方向性が示されている<sup>〔1〕</sup>。特に、神野志隆光著『万葉集をどう読むか』（東京大学出版会、二〇一三年）が刊行され、ここまで神野志論文によって主張されてきた「『万葉集』二十巻としてあるものを見る」という主張がまとまりを見せたことで、その傾向はいっそう強まったと考えられる。

この動きは、西澤一光論文が主張してきた「集蔵体」としての『万葉集』といった見方や、市瀬雅之・城崎陽子・村瀬憲夫著『万葉集編纂構想論』（笠間書院、二〇一四年。以下『構想論』とする）の「あるがままの『万葉集』——現態——

—をみる」という主張と相まって、万葉集研究に『万葉集』全体を視野に入れた立論が要請されてきているといつてよい。

平成二六年度上代文学会秋季大会シンポジウムにおいて筆者は、「万葉集編纂構想論」（以下「構想論」とする）の立場から『万葉集』を読み解くことの主張をした。この主張が、『構想論』に拠っていることは言うまでもない。その中でも筆者は「部類歌巻——歌だけをみつめてこれを部類した巻——」の「構想論」と「作品論」との位相や、巻七から巻十六の『万葉集』における「構想論」的位置づけを改めて主張した。本稿は、その際の内容をまとめたものである。

## 二 「構想論」と「作品論」との位相

### 1 「構想論」とは

本題に入る前に「構想論」で主張した「構想」と「構想力」について定義することからはじめてみたい。「構想論」が主張するところの「構想」とは、「二十巻を編み、形作るための志向、その志向を支える理念や理想、または主題」をいう。また、「構想力」とは、「標題をはじめ、題詞や左注、歌の取舍選択や配列等を利用して「巻」、あるいは、「歌集」という形に整えようとする力」をいう。<sup>3)</sup>

本来、「構想」から「編纂」へという流れがあつて、『万葉集』二十巻は成り立つわけだが、現実問題として『万葉集』の中で「構想から編纂へ」という流れを正確に追うことはできない。したがつて、「あるがままの姿（現態）」から「構想」を見出すことによつて、『万葉集』という一つの作品を形成していく「構想力」を導き出し、それを読み解くことで、『万葉集』の編纂を解こうと試みたのが「構想論」である。言い換えれば、『万葉集』という一つの作品を作品として構成する「構成力——つながり——」を明らかにすることが「構想論」によつて導き出される『万葉集』の編纂である。

### 2 「構想論」と「作品論」との位相

ところで、ここに一つの課題が生まれる。それは、「作品論」との整合性である。一首の歌は、選択された言葉が相互に関連され、そこに「情調」が盛り込まれて一つの作品として成り立っている。<sup>4)</sup>この時、言葉の「意味」と、これを「選択」し、「情調を盛り込む」という論理の相互関係を明確にすることが「歌を読み解く——作品論——」ということであると考ええる。当然のことであるが、「歌を読み解く」という論理は対象となる「歌」の内部で完結しており、これが、「歌」を読み解くことには有効であつても、歌が配列され、巻を成し、『万葉集』という一つのテキストを成す「構想」を読み解く論理に成ることは容易でない。つまり、「歌を読み解く」とこと、「構想を読み解く」とことは、「歌」と対峙して読み取る情報が異なる——「歌を読み解く」ことは、「この歌は」という命題のもとに「言葉」と「言葉に込められた情調」の相関関係を読み解くことを指す。一方、「構想を読み解く」ことは、「この歌の存在する必然性は」という命題のもとに、歌と歌との相関関係や存在意義を読み解くことを指す——のである。これが、「構想論」と「作品論」との明確な位相だ。しかし、『万葉集』は歌の集合体であり、この『万葉集』を「あるがままの姿」で解こうとする場合、やはり、問題となるのが「歌」であるという宿命は避けられない。「構

想論」において最も「歌（作品論）」との関係性を問われるのが「部類歌巻」の問題である。「部類歌巻」は題詞や左注といった歌の事情を示す情報に抛らず、「歌だけを見つめて巻を編纂しようとする『構想』の上に成り立っている。言い換えれば、「構想論」によって、「部類歌巻」の「構想」を説く時、その「構想力」は作品に求める他ない。「部類歌巻」の「構想」を説くことは、作品からそれをどう読み取るかという問題とのせめぎ合いでもあるといえる。

### 3 部類歌巻の構想

ここで「部類歌巻」について定義しておく。<sup>6</sup>『構想論』で筆者は「部類歌巻」とは巻七、十、十一、十二、十三、十四の六巻を指すとした。これらの巻は「歌だけを見つめて巻を編纂する」という「構想」と、その「つながり」によって相互に関連性を持つ。そして、歌をいかに部類するかという点において『万葉集』の内部での存在意義を持っている。この「いかに部類するか」という点に「歌の表現性（表現論）」との位相が問われることは先に述べた。まずは、筆者が『構想論』において、主張した「部類歌巻」の「構想」を次にまとめ、論を進める。

#### ①「羈旅」という場による整理整頓

#### ②「問答」という表現形式による整理整頓

③「季節」という表現形式による整理整頓  
④「譬喩」という表現技法による整理整頓  
⑤「東歌」という世界観による整理整頓

「部類歌巻」全体の「構想」は、言わば、「歌の整理整頓」である。「羈旅」「問答」「季節」「譬喩」「東歌」といったテーマに沿って、歌を整理整頓するわけだが、例えば①の「羈旅」には旅をテーマに歌を詠うだけでない、旅によって思いを発する——「羈旅発思」——といった、より明確な情調の設定や、「悲別」といった旅の別れによって生み出される情調の、さらなる表現性の追求がみられる。また、複数によって歌を詠いかわす表現形式に沿って歌を整理整頓する②の「問答」には、相互に歌を詠いかわす際に必要とされる表現性を追求した結果立てられたであろう「譬喩」という部類基準が含まれていた。こうした部類の「細分化」や表現性の「深化」といった現象は、「構想」という問題と「歌」のもつ「表現性」との問題とが相互に関係性を持った結果生じたものであったと考える。

ところで、こうした整理整頓の中に一つだけ特異な基準があることに気づく。それは⑤の「東歌」にみえる「世界観」という部類基準である。これは勅国歌・未勅国歌双方の歌が「東歌」というテーマの下に集積されたことによって、巻十四全体が何を「構想」の基準としたのかということ

とを考えた場合、「くに(国)ぶり」とでもいうべき意味内容を内包する「東国」という世界観」と総括することが最もふさわしいと判断したことから導き出したものである。この抽象的な部類基準は「部類歌卷」の他には例のない基準である。しかし、その抽象的であることに普遍性を内包すると考えるならば、「部類歌卷」と他の歌卷との「構想」の「つながり」を問う際にも重要なカギを握る基準になると思われる。すなわち、部類歌卷の当初である巻七から巻十六までをどのように考えるかということと関わっていると推察する。

### 三 巻七から巻十六までをどのようにとらえるか

#### 1 「部類歌卷」と巻九、巻十五、巻十六の位相

標記の問題設定について、前章までを整理し、その前提についていささか言及しておきたい。筆者は「部類歌卷」を巻七、十、十一、十二、十三、十四の六巻とした。これらの歌卷には「歌の整理整頓を行う」という「構想」があった。しかし、「構想」の基準になる「歌の場」や「表現形式」、「表現技法」といったものは明らかに異質な基準——「世界観」——が巻十四には想定された。この異質性は、「部類歌卷」内部における巻十四の異質性でもある。しかし、一方でこれは、「部類歌卷」の「整理整頓」と、

その基準となった「場」や「表現」の問題を超える論理として捉えなおすことのできる基準であると考える。

言い換えるならば、「世界観」という基準は、「部類」という行為を包括し、これを超えて、例えば巻七から巻十六という一連の歌卷が内包する「構想」の基準としてとらえることができるのではないかと考える。そして、このことは巻七から巻十六までの歌卷の中で残された問題——巻九や巻十五、巻十六の位置づけ——に「歌の整理整頓」という「構想」を「世界観」という基準によってより広範囲に敷衍していくことができると考える。

#### 2 巻九の部類

巻九は、人麻呂歌集、虫麻呂歌集、福麻呂歌集といった私家集から集積された歌を三大部立によって部類する巻である。題詞や左注の統一感に乏しく、集積された歌の内幕に一貫したテーマを求めることは難しいが、巻七の示した「羈旅歌」の世界と重ね合わせてよまれるところに連続性——「つながり」——が認められることは、すでに市瀬論文「つながりという視点」に示されている。なお、市瀬論文は、巻九の「つながり」を「構想力の弱い巻は、構想力の強い巻との間に置かれることで、その主張が表現されている」とし、巻八、巻十といった「季節」という強い主題性

をもつ歌巻との結束を説いている。

### 3 卷十五の部類

卷十五の部類は、天平八年（七三六）に新羅へ派遣された遣新羅使人歌一四五首と、天平十一年（七三九）から十二年（七四〇）にかけてのころに勅勘によつて越前国に配流された中臣宅守と狭野弟上娘子の贈答歌六三首に二分される。

遣新羅使人歌は、(A) 出発にあつての歌（三五七八～三六一一）、(B) 長井の浦から対馬・竹敷の浦までの歌（三六二～三七七）、(C) 帰路の歌（三七八～三七三）の大きく三部にわかれる。<sup>11</sup> その内実は「羈旅歌」としてまとめられるが、これらは「遣新羅使の旅」というテーマによつて、一連のものとして配列されている。

この歌群については、大浜巖比古論文「卷十五」が「実録風な創作」と評して以来、様々な研究史的展開を見せている。これについては、村瀬憲夫論文「遣新羅使人の歌」がその詳細を示している。<sup>12</sup> 村瀬論文に拠つて、およその流れを示すと、当該歌群のとらえ方については「実録」か「虚構（創作）」か、という二つの結論の中で揺れてきたといえる。しかし、全くの「実録」、あるいは、全くの「虚構（創作）」という見方はなく、「実録に基づきながらも歌

の配列等に物語性を持たせている」といった見方が大方を占めている。その一方で、「実録」部分を成り立たせている遣新羅使の歴史的社会的側面を確認し、航路における現実の風土や作歌時の環境の反映を個々の歌に見るべきであるという視点からこれを追求しようとする論もある。<sup>13</sup>

遣新羅使人歌群に対する大浜巖比古論文がいうところの「実録風な創作」という評価は、「創作」という用語に「文芸性」を観想することで「実録」「虚構」といった論争を生んだのであるが、こうした論議のあり様はすでに尽くされている。むしろ、視点を変えて、「遣新羅使」というテーマに沿つて集積し、配列するという「構想」の下に示された「遣新羅使の世界」とも言うべき「世界観」が表出されていると見るべきであろう。これを享受する側は「遣新羅使の旅」を、「遣新羅使の世界」として追体験することになる。言い換えれば、「遣新羅使の世界」を享受者に提示することが「構想」、そして、それを「追体験」することが遣新羅使人歌群の「構想力」とあるといえる。

中臣宅守と狭野弟上娘子の贈答歌は、(A) 宅守の立出（三七三～三七三〇）、(B) 宅守の配所到着（三七三～三七五三）、(C) 配所にてのその後（三七五四～三七八五）の大きく三部にわかれる。<sup>14</sup> その内実は、「中臣宅守と狭野弟上娘子の悲恋」をテーマにした「贈答歌」である。これらは

「中臣宅守と狭野弟上娘子の悲恋」というテーマによって、一連のものとして配列されている。これを享受する側は、出立から配所到着、そして、その後と時間の経過に従って「中臣宅守と狭野弟上娘子の悲恋」を「追体験」することになるのだ。当該歌群も「悲恋」というテーマに沿って歌を集積することが「構想」であり、「追体験」がその「構想力」であったと言える。

以上、二つの大きな歌群から成り立つ巻十五は「世界観の追体験」という視点をもって、『万葉集』の中に位置づけられる。

#### 4 巻十六の部類

巻十六の部類は (A) 昔男・昔女の恋(三七八六～三八一五)、(B) 男女の戯歌(三八一六～三八五四)、(C) 民謡・芸謡(三八五五～三八八九)の大きく三部にわかれる。その内実は、巻十六の部立名として立つ「有由縁雑歌」——「由縁のある歌」——を集積することにあつた。

伊藤博論文「万葉集の成り立ち」<sup>17)</sup>は巻十六を卷一から巻十五までの「付録」ととらえる。しかし、「つながり」という視点からみれば、これは「付録」というよりも、むしろ巻十五でみた「追体験」という「構想」による歌の部類ではなかつたかと考える。巻十六は「由来による歌の世

界」を「追体験」するための巻であつたのだ。

#### 5 「古歌誦詠」がもたらす「構想」

ところで、この「追体験」という実態が、『万葉集』の中でどのように位置づけられる問題であるかは考えておかなければならない。『万葉集』における「世界観の追体験」という「構想」は、例えば「古歌誦詠」という事実とその源泉があると考ええる。

先に扱った「遣新羅使人歌群」の中には「当所誦詠古歌」として収められている柿本人麻呂歌(三六〇六～三六一〇)がある。これらの歌は卷三の「柿本朝臣人麻呂鞆旅歌八首」(二四九～二五六)を引き受けての詠作であることが左注に示されている。表現の特質として、菊川恵三論文「人麻呂鞆旅歌八首と遣新羅使人歌誦詠古歌」が「誦詠古歌が遣新羅使人歌群と極めて等質の用語、発想を持ち、時には明瞭な対応を持つ」ことを指摘している。これは、人麻呂歌を「古歌」として位置づけ、この「古歌」の示す世界観を「用語」や「発想」を通して等質に引き受けていることを意味するだろう。つまり、「人麻呂歌の世界観」を等しく引き受け、その表現や情調を享受しているのである。

また、「遣新羅使人歌群」の中には「古挽歌」(三六二五～三六二六)が存在し、この歌については阿蘇瑞枝論文「遣

新羅使人詠「古挽歌」考に「古歌の詠詠によって、彼等が次第に旅情を深め、ひいては旅中歌の詠出を促す契機にもなったであろう（中略）特に、壱岐島での挽歌の詠作には、先立つ古挽歌の詠詠が、詠作者の心理に有形無形の影響を及ぼしていたであろう」という見解が示されていることが参考される<sup>20</sup>。具体的には、「古歌（古挽歌）」を詠詠することによって、常なき世であることを「行く水の還らぬ如く吹く風の見えぬが如く跡も無き世」（三六二五）と表現した遣新羅使人らは、雪連宅満が壱岐島において「鬼病」に罹り、死去したことを悼む挽歌（三六八八・三六九六）で、「世の中は常かくのみ」（三六九〇）と引き受けていることなどがあげられよう。阿蘇論文の主張は、「古挽歌」で詠まれた「世界観」を雪連宅満の挽歌へと影響させていくことを意味しており、これも「世界観」を引き受けていると言つてよいだろう。こうした細やかな「世界観の追体験——引き受け——」が「構想」となり、巻をつなぐ「構想力」となっているのである。

東歌の「世界観」は「東国という世界」を知らしめる点において『万葉集』の中にその位置を占めていた。巻九は「羈旅の世界」という視点から一つの世界観を構想していた。また、巻十五は「遣新羅使の旅」や「中臣宅守と狭野弟上娘子の悲恋物語」といったそれぞれの歌が集合して表

す「世界観」が構想され、その「世界観の追体験」という点において『万葉集』の中に位置づけられている。これは、様々なシーンにおいて「歌の由来による世界」を描く巻十六にもうかがえることである。「古歌詠詠」といった行為の中から感得された歌の示す世界の享受——世界観の追体験——という「構想」および「構想力」を設定することによって「歌の場」や「テーマ」、さらに「歌表現」を読み解く選択肢は広がることになろう。

#### 四 おわりに

本稿においては、「構想論」が拓く地平」として以下の二点を課題として立て、「構想論」という方法によって『万葉集』をどこまで一つの作品としてとらえられるかという点について論じた。

##### ①「構想論」と「作品論」の位相

②巻七から巻十六までをどのようにとらえるか

繰り返しになるが、「構想論」は『万葉集』のあるがままの姿を見ることから「構想」を読み取り、万葉集の編纂を考えようという主張である。本稿において、「構想論」を援用することで拓かれる新たな展望は、「部類歌巻」である巻十四が「世界観」という「構想」によって「部類」されていたことを踏まえ、巻十五、十六の「構想」を「世

界観の追体験」とした点にある。

村瀬憲夫論文「末四巻編纂の構想（二）」では卷十七以降の巻、特に、家持の越中赴任中の歌等を示して、「都び」と『家持』が夷に身を置いて詠った都視線の世界」としたが、その「都びとによる都視線」には、例えば「越中の世界の追体験」という構想が含まれていたということになる。『構想論』の中で、大伴家持は「家持」としてとらえるべきことが主張されているが、これは、『万葉集』にみえる大伴家持は構想された世界の中の「家持」であって、実像とイコールではないことを意味しているのだ。

最後に、本稿で扱うことはできなかったが、「構想論」における「構想」という視点は『万葉集』内部において集積した歌をどのように捉えるかという「享受」の視点」を抱えていることについて言及しておきたい。それは、「あるがままの『万葉集』をみる」という立場に立つことによる必然であると言え換えてよい。そして、この『万葉集』内部の「享受」の問題は、後世における『万葉集』享受の問題をはらんでいる。この二態の享受の相違については既に論じた。特に、後者の享受の問題は『万葉集』の注釈史の問題へと発展する要素を内包している。あるがままの『万葉集』をみて、その「構想」を捉えるという思考は時代を超えるわけで、ここに、超時代的な編纂論、あるい

は、編纂論史を構築することができるのではないかと考え、目論む次第である。「構想論」によって拓かれる地平ははるかに続いていることを記し、筆を置く。大方の叱正を賜れば幸いである。

## 注

(1) 金澤英之は『リポート笠間』（No.五七、二〇一四年一月）の中で、当該の方向性を「作品を（作者）の意図や構想から独立した統一体として読むテキスト論」としている。『万葉集』の「現態」を捉えようとする「構想論」はこれに含まれることを主張しておく。なお、シンポジウム席上で指摘された問題に、「テキスト」の問題があった。『構想論』がいうところの「現態」という言葉には、「現在伝わる古写本・古筆切等を校訂して成る『万葉集』テキスト」の意が含まれる。このテキストが『万葉集』原本とイコールであるかどうかということは、原本が失われている以上、確かめることはできない。「現態」の内実は、今後の本文研究によっては変更される可能性もないとはいえないが、ひとまずここではおいておく。

(2) 西澤一光論文「集蔵体としての『万葉集』をめぐる」——方法的に読むための一試論——（『古代文学』第五二号、二〇一三年三月）、『万葉集』集蔵体論の展開——テキストと歴史の問題をめぐる——（『萬葉集



研究』第三四集、二〇一三年一〇月)他。

- (3) 村瀬憲夫論文「万葉集編纂構想論——本書の志向するところとその概要——」『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年。

(4) 「情調」とは「おもむき」や「喜怒哀楽などの感情」を示す。ちなみに、当該の用語は心理学で用いられる翻訳用語であり、特に折口信夫論文「言語情調論」(『折口信夫全集』二九卷)によって文学の言語作用について説明する際に用いられた。折口は、言語には「類化作用」「表号作用」「音覚作用」の三種類の作用があることを指摘し、「類化作用」と「表号作用」の二つによる瞬時の連想は言語を介して事象を知覚され、「音覚作用」による情調の象徴的な表象は、事象そのものの全体を直覚させるといふ論理によって、言語の働きを説いた。

- (5) 城崎陽子論文「部類歌巻の編纂」『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年。

(6) 城崎陽子論文「部類」という志向」『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年。

(7) 「くにぶりに」とは、折口信夫論文「松の葉」(『折口信夫全集 ノート編一八』)に「大和宮廷からいうと、地方の国にいるんな歌がある。それが『くにぶりにうた』、略して『くにぶりにだ』と示されている折口名彙を指す。

(8) 巻七から巻十六という区切りは、巻七が「部類歌巻」であることの意義を『万葉集』というテキストの中で、より積極的にとらえようとした結果である。

- (9) 伊藤博論文「万葉集の成り立ち」(『萬葉集釋注』十一、集英社、一九九九年三月)において、伊藤博氏はここにも古今構造を見ようとしている。

(10) 市瀬雅之論文「つなぐという視点」『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年。なお、市瀬論文において、巻一から巻十六を「時間軸に沿った歌世界」とし、これに重ねて、「分類した歌」である巻七から巻十六を「重ね読ませる構想」があることを説く。巻七から巻十六までの歌のあり方を考えると、本稿との矛盾はない。

- (11) 注9伊藤前掲論文参照。

(12) 大浜巖比古論文「巻十五」『万葉集大成』巻四、平凡社、一九五五年。

(13) 村瀬憲夫論文「遣新羅使人の歌」『セミナー 万葉の歌人と作品』第一巻、和泉書院、二〇〇五年。

(14) 「実録」に基づきながらも、歌物語としての組み立てを論じたものには、伊藤博論文「万葉の歌物語——巻十五の論——」(『万葉集の構造と成立』下、塙書房、一九七四年)、大浜真幸論文「遣新羅使人悲別贈答歌十一首の構成」(『万葉』九七号、一九七八年六月)などがあげられる。また、「実録部分(録事による集録ノート)」と「創作部分(後の追補)」の分別を厳密に行った論としては、吉井巖論文「遣新羅使人歌群——その成立の過程——」(『万葉集への視覚』和泉書院、一九九〇年)がある。また、遣新羅使人歌群の『万葉集』への組み入れを主張した吉井前掲論文に加え、そうし

た家持の動機や組み入れた時期までを論じた市瀬雅之論文「望郷の念と歌群の編纂——遣新羅使人歌群の場合——」(『大伴家持論——文学と氏族伝承——』おうふう、一九九七年)もある。一方、「実録」や「虚構」といった論議を離れ、遣新羅使人らがどんな思いを抱き、どんな風景を見ていたかといったことを史料的に検討し、歌の解釈へと援用した廣岡義隆論文「波濤を越えて——遣新羅使人の旅——」(『水辺の万葉集』笠間書院、一九九八年)もある。

(15) 注9伊藤博前掲論文には、当該(C)部の分類を「およそ半年を経て」「およそ一年を経て」「独詠、配流二回目の夏を迎えて」とさらに三分類している。また、伊藤論文は「独詠」という点に着目し、これを「古くからの歌語りの方法」としているが、ここでは、歌が時系列に並んでおり、さらにはそれが一連のものとしてとらえられていることが理解されればよいと考え、細分化することはしなかった。

(16) 当該の標目については、古写本に「有由縁雑歌」(四)と「有由縁并雑歌」(尼・紀他)の二通りの記載がある。伊藤博注9前掲論文では、これを巻十六に至る段階的な追補・増補の結果、「并」が書き加えられたとするが、巻十六が「由縁のある歌」を中心に集められていることは内実からも明らかであるから、ここは、「由縁のある歌」の集積と大きくとらえておく。

(17) 注9伊藤博論文参照。

(18) ここでいうところの「古歌」は「古い歌」の意ではない。「古歌」の「古」は「今」に対する「今より以前」の意とする。

(19) 菊川恵三論文「人麻呂鞍旅歌八首と遣新羅使人歌詠古歌」『国語と国文学』七八卷三号、二〇〇一年三月。

(20) 阿蘇瑞枝「遣新羅使人詠詠「古挽歌」考」『万葉和歌史論考』笠間書院、一九九二年。

(21) 村瀬憲夫論文「末四巻編纂の構想(一)」『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年。

(22) 巻十七(巻二十)の末四巻において、大伴家持を主題化された存在としてみる見方は、市瀬雅之論文「白雪応詔歌群の場合」(『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年)が主張するところである。なお市瀬論文の着想は、鉄野昌弘論文「家持『歌日誌』とその方法」(『大伴家持『歌日誌』論考』塙書房、二〇〇七年)に、巻十七(二十)が「総体として、大伴家持という一人の官人の軌跡を描こうとしている。」とする指摘の上にある。また、そうした大伴家持を「家持」として書きわけることを明確に指摘しているのが、村瀬憲夫論文「末四巻編纂の構想(一)」(『万葉集編纂構想論』笠間書院、二〇一四年)である。

(23) 「享受」という視点に二態あることは城崎陽子論文「万葉集編纂構想論における「享受」二態」(『國學院雑誌』第一一五卷一〇号、二〇一四年一〇月)に述べた。